

土

淨

八月号



法然上人鑽仰会

昭和十月五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和四十一年七月二十五日 印刷 昭和四十一年八月一日発行

第三十二卷

第八号



浄土に生まれたいと願う者にも、性質と行為によつて九種の段階がある。これを九品（くほん）と呼び阿弥陀仏をこの九種に配当して、九品の阿弥陀としてひろく親しまれてきた。それを示す弥陀の手指にもおのずから違いがあり、われわれはその手指から九品の違いを判断しようとしている。しかし、このこと自身愚かな人間の行為である。みほとけが人間を見るのに区別のあるはずがないからである。とすれば人間が人間を九つに区分けしていると言ってもよい面がある

浄瑠璃寺の九体仏はどれを見ても、弥陀の定印（じょういん）を結び、いわゆる上品上生印をとっている決して九品にあてられた違いを示してはいない。拝む人間によって、上品（じょうほん）の弥陀も下品（げほん）の弥陀に受けとられ、下品の人間も上品の弥陀に摂取されることになるのであろう。しかもお堂の縁側から拝むと、柱の間隔が程よく、一仏しか拝めないすばらしい巧みさがある。九体のみ仏が実はただの一仏にすぎないことを、まのあたりに知ることができる愚かな人間にこれほど強く訴える実感はなかったことであらう。

みだうなる九ほんのひさにひとつつつ

かき（柿）たてまつれ ははのみために



末代悪世の衆生、往生の
心ざしをいたさんにをきては、
又他のつとめあるべからず。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「魚たち」松濤達文画

随想	浪谷賢亮 三田全信.....	(2)
ビートルズの先祖	竹中 信常.....	(4)
座談会 お盆と生活(2).....		(8)
— . — . — . — . —		
ベトナムに祈る(1)	小布施弘学.....	(20)
信仰体験記		
ものいう「阿弥陀様」.....	武田 了範.....	(12)
み光を拝して	大西 ハル.....	(14)
無媒随録	須藤 隆仙.....	(11)
現代語訳 歎仏偈	吉田 定久.....	(16)
お経の話 仏身と仏心について	村瀬 秀雄.....	(17)
— . — . — . — . —		
家康と三河一揆	鶴田 湛泉.....	(23)
人生相談 痛手をこえて新しい途を		(27)
質問帳 年回法事を営む心構え		(26)
ご法語をいただく		(31)
信仰の手引 仏前の花		(32)
連載 続話 みんなの法然さま・鉦すての藪.....	高橋 良和.....	(28)



信州のお盆

渋谷賢応

盆にやおいでよ正月は来でも
死んだ仏も盆にやくる

こんな伊那節がある。どこでもそうであるように、特にこの山国ではお盆の十三日より十六日の四日間は、忙がしい農業の手を休めて、先ずほっと一息入りたいひと時であり、仕事を一区切りつける目安でもあり、盆勘定の時節でもある。

いているおかあさんの顔もいかにも満足そうである。

盆踊りは何んと言っても木曾が有名である。正調木曾節はテンボが速く、ヨイヨイヨイのヨイヨイヨイと力が入っている。

明けりやお寺で鐘をつく

と夜のふけるのも知らない。

十五日の諏訪湖の花火も近頃盛大になって来た。人造の島より打ち上げる花火が夜の湖に映えるのは何とも言えない美しさである。壮大な仕掛花火が特に美しい。

送りましようかみ仏さまを
なすのお馬で峠まで

十七日には天竜の燈籠流しが行なわれる。天竜くだりの出発点市田の河原に、新盆の燈籠が集められ、麦わらの筏に乗せられて次ぎ次ぎに流される。見えなくなるまでとほって行く燈籠、荒波にはかなく消える燈籠、すべてがさびしい。

師弟というもの

三田全信

近頃の学校では、とかく師弟の関係が薄らぎ、老先生を軟禁して困らせるような学生があるが、私は法然上人の諸伝を研究して一番感銘した事は、觀空上人と法然上人の師弟である。同じ棟の下で朝夕寢食を共にされたが独立を認められて法然上人は下山された。或日觀空上人の室を訪れ、さまざまな話の末お念仏の事に及んだ。法然上人は口で唱えるお念仏がすぐれていると主張されたので、觀空上人はいや先匠は皆心で念ずる念仏がすぐれていると申されているのだと論じられた。

上人は自信があつたので仲々主張を改められなかった。觀空上人は師匠良忍上人からの相伝に背く生意氣坊主めと木枕を投げつけられた。それでも法然上人は良忍上人は先に生れ給うただけであって勝れているものは勝れ

迎え火は、諏訪地方を中心として、白樺の皮を焚くのがならわしで、盆近くになると、子供たちははぎ、ききょうなどの盆花と一しよにこの白樺の皮をとってくる。少々生木でも、実によく燃える。黒煙を夜空に上げながら、めらめらと燃え上る火に石塔など照らし出されるとき、あの煙に乗ってみ仏さまが、ほんとに家のお棚までお迎えできるのだと言う神秘感にまでひたる想いがする。

松本のお盆は子供の祭りでもある。町内の男の子等はみこしをかついで町中を練り歩き家ごとに「青山さまだよワイショ、コラショ」とくりかえして、ワイワイアイとはやし立てる。家の中よりお賽銭を持っておかあさんが走って来るまでそれをくりかえす。少なければまた続ける。山法師の後裔である。

女の子はぐつとみやびやかに、赤いちっちゃな盆提灯をもって、美しい浴衣に美しい三尺帯をしめて、小さい子より大きい子まで背の順に並んで盆歌をうたいながら町内を廻る。まだよく歩けない子供に長袖の着物を着せ、お化粧をして赤い提灯を持たせ、抱き歩

ここで北信州の今年のお盆を考えたい。去年八月に始った松代地震は、ゆれにゆれつづけ一周忌を迎える。学者はいろいろと説をなすが何もわかつちやいないというのがほんとうだろう。壁は破れ、石塔はころぶ、ころんだ石塔を直す気にもなれないまま、盆を迎える。学校の子供たちも机の下にもぐったり出たりして一年になる。本堂に裏山から大石がとびこんで来て大破した寺もある。あらゆる新興宗教が入りこんで祈禱をしたがそんなことで治るナマズ君ではなかった。

寺方が集って盆施餓鬼をしたらよいかどうかを協議した。やはり新霊供養のためには行なうべきであるということだったが、さて例年のようなお参りがあるだろうか、もし、万が一そのときに、ほんとうに大きいのが来たらどうしようかと心配しておられる。

この大地が、動かずにいてくれることがどんなに有難いことか、思ってもみなかった感謝の念を痛感するとともに、その無事を祈るや切である。

ていると言葉を返されたので、今度は我慢ならぬと庭下駄で打って先匠に背く不屈者と叱られたとある。しかし臨終には財産の譲状を法然上人に与え、絶息の後又蘇って進上と書き改められたとある。老師觀空上人は保守の殻を脱ぐことが出来なかったが、若い法然上人には革新の血が湧き立っている。老いの保守、若さの革新という思想は、昔も今も同じであるが、觀空上人が前のはげしい論争などけろりと忘れて、自分の後継者という尊い使命をもつ法然上人に対して、あたかも自分の師匠のように敬意を表されているが又凡人ではない。師弟というものは、元来は全く他人である。全くの他人が親子以上に親しくなれるのは私共の場合は仏縁とよんでいる。私は小僧時代に師匠の夕食には必ず行儀よくお給仕をしなければならなかった。師匠は寺を持った障子の切張をよくやれとか草を引けとか話しながら二切の湯豆腐を必ず残して、自分の箸でつまんで小僧の私の口へ入れてくれた。今私が師匠のような老齢になってこの事を想出すと思わず涙がぐれて溢る。

ビートルズの先祖

竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)



昨年のいまごろは、国際宗教史会議に出席するための準備

で、旅券の申請だとか、注射だとか、打合せ会だとかと暑い夏を一そう暑くすごしていたものである。アメリカ領事館にビザを貰いに行った帰り、両サトー・ジュニアとホテル・オークラのスカイ・ラウンジでハイボールなどなめながら、心はすでにアメリカへとといった一幕もあった。

一年たった今日、同じく暑い東京で、汗をかきながらすごしているが、その一年のめぐりに、われもひと世界も、大きく変わったのであろうが、当人は一向にあいかわらずの凡愚に悩んでいる。

ハワイで大変お世話になった松濤弘道氏も十一年ぶりで帰国された。その反対に、峰島旭雄氏が交換教授として来月渡

米される。

たしかに世界は狭くなった。わたし如きものですら、すでにヨーロッパとアメリカをへめぐって来ており、羽田へ行けば五分毎に国際線が発着し、行く人、帰る人で混雑している。いまや、日本は世界の中の日本であって、日本だけを切りはなしては考えることはできない。ニューヨークのエンパイアステート・ビルは八〇階でエレベーターをのりかえて、一二〇階の頂上へつく。「エレベーターののりかえ」なんてはじめてであるが、そうしたおどろきが、すでに実感となって日本人の肌迫っているのである。

ロスアンゼルスの浄土別院の野崎靈海氏のお宅の台所には、奥さんご自慢の「電気食器洗い器」が偉容を誇っている

た。アメリカの家庭婦人の最大のなやみは、あまりに機械化された日常生活のために、運動不足になり、むやみやたらにふとることだとのこと。掃除、洗濯、調理、あと始末全部機械ですましたのでは、なるほど、運動不足になるのはあたりまえである。それともう一つの心配は、男の子をもった母親の、ベトナム戦争への心配である。徴兵制度がひかれ、いつなんどき最愛の息子を戦場にとられるかわからぬという不安である。かつて、日本の母たちが抱いたこの悩みを、いま、アメリカの母たちは深刻に味わっているのである。

外見上、国土は広く、ものはゆたかで、日々の生活は非常にめぐまれているアメリカ人も、いろいろの悩みをもっているのである。

台風四号とともに、ビートルズがやって来た。そして、四日間、かすかすの話題をまきちらして風の如くに去って行った。日本中のハイティーンの女の子たちは、ビートルズ来るというので色めき立ち、その公演を見たものの中には感激のあまり泣き出したものも沢山いたとのことである。あの奇妙なヘヤースタイル、中性的な風貌、骨ずいにまでひくような声。謹厳な社会評論家はこの奇妙な流行に何とかりくつづけをしようとして「中性的なものへのあこがれ」であるとか「完全性への反抗」であるとか「どん欲なコマースリズム

の演出だ」とかいつているが、りくつはなんとでもつくとして、現実には、羽田には泣く子もだまるその名も高き警視庁機動隊の精鋭が出動し、会場の九段の武道館には十重二十重のファンがつめかけ、その宿舎ヒルトン・ホテル付近は戒厳令同様のもののしきであった。もっとも、おおいに海外公演をしてポンドをかせいだというので、イギリス政府からくん章を授けられたというのだから、これくらいの警戒も当然かもしれない。

それよりも、考えなければならぬことは、りくつはなんとしても、一目みようと徹夜で長い列にいらんだり、公演をみて泣き出してしまうというファンの気もち。というよりはなぜ、そのような熱狂的な気もちにさせられるのかということである。りくつではワリ切れぬ人の心のあやというものである。

アメリカの家庭婦人のなやみにしても、ビートルズ・ファンの熱狂にしても、すべて共通の根から出ているようである。——それは、人間というものは、あまり完全になりすぎると、いたたまれなくなつて、これからのがれようとするものである。そのことは、ビートルズを生んだ国が、世界でもっとも謹厳な紳士の国といわれる英国であることからいえるよう。ニューヨークのどまんなかのクリニッチ・ヴィレッジ

の一角に、長髪、ひげもじゃのビート族がたむろしたり、銀座のみゆき通りに、頭陀袋をブラさげたロング・スカートの女の子がウロツクのも、すべてこうした心情のあらわれといえよう。

ものごとというものは、一方があまりにすすみすぎると反面に、全然逆な方向をたどるものなのである。新幹線が現在の科学の最高の技術によって、二〇〇キロのスピードで東海道を疾走する反面、ほんのちょっとした地震や雪や雨などですら、思わぬ事故がおこる。ニューヨークや東京といった世界的な都市のどまんなか、むさくるしく髪の毛をのばした奇妙なやからがタムロする。いずれも「完全すぎることからうまれる不完全への逃走」ということができよう。

ひとの心には、こうした、りくつでははかることのできぬ動きがある。つまり、あまり立派な着物をながく着ていると肩がはってしまい、家にかえって早速はだかになってしまうというわけである。そして、人間の本来の姿や心にかえりたいとねがうのである。

「愛しちゃったのよ／＼」という歌もかなりこのねがいをこめているように思えたが、その次にはやった歌は、ズバリ、人間のあからさまな心情をうたっている。

わたしのねがい、ただ一つ

骨まで、骨まで、骨まで愛してほしいのよ

数万年前、まだ人間が熊の毛皮を身にまとい、棍棒をもつてけものを追いまわしていた太古の原始人の「恋のうた」でも顔まけするよううたである。これが二十世紀の科学時代にいきる現代日本の若い人々が、熱狂してむかえるうたなのである。人間の心というものは、このように、科学や文明の進歩とは関係なく、いやむしろ科学や文明がすすめばすすむほど、その真底にはぬきがたいものをもっているのである。

そこで、思念の糸は少しく飛躍するが、聖道門と浄土門あるいは坐禪と念仏についてもこのことがいえるのではないだろうか。仏教の教理はほかの宗教のそれにくらべると、きわめて理路整然としてよく「智慧の宗教」といわれるほど、合理的である。とくに、大乘仏教の哲理は透徹した理性の産物であり、いささかの非合理も神秘をも容れることのない完全な論理体系をなしている。日本の仏教の歴史の上で、法相、華嚴、天台などがうち立てた教学は、まさしく完全性の典型といえよう。他方、禪もまた、もっぱら坐禪冥想の境地を求めて、人間の心の完全性をつくり上げようと努力する。

このようなときに、その完全をふりすてられたのが、宗祖法然上人であった。

「……もし智慧をもちて生死をはかるべくば、源空（法然

上人の名)いかでか、かの聖道門をすてて、この浄土門におもむくべきや。聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて極楽にうまるとしるべし……」

勅修御伝の第二十一巻には、このような言葉がのべられている。完全な智慧はよって仏道を成就することができなければ、いっそ、不完全のままに、情感的に、安心を得るべきであらう。

ここでいう「不完全性」とは、宗祖のいわれるごとく、みずからの愚鈍、罪根、無知を自覚することである。人間の合理的、科学的な完全性をいくら追い求めても、所詮、煩惱具足のこの身が、自分の力で解脱し、成仏することは不可能である。現代の機械文明、科学主義がどのように発達しようとも、アメリカの家庭婦人の悩みを解決し得ないのと同じく、人類は幸福にも、平和にもなり得ないのである。なぜならば人間は、その心のおく深くに、決定的な不完全をもっていてそれは外がわの科学や学問がいくら進歩しても変りなく、心の底にわだかまっているからである。先に述べたように、数万年前の太古の人間と、二十世紀の現代人と、その心情の点ではすこしのちがいても、発達もない。やはり同じように「骨まで愛してほしい」のである。つきつめていうなれば、ほか

の面ではとにかくとして心情の面では、人類は数十万年の間を空費したことになるのである。ビートルズが来たといっ
ては泣きわめき、することがなくなってふとってしようがない
といって悩む。この心情こそ、科学とか文化とかといった
附焼刃をはぎとった、人間本来の心情ではないだろうか。

宗祖の教えの門に、強盗や遊女や愚鈍下賤のものがむれあ
つまったということは、現代的に表現するなれば、ビートル
ズにあこがれ、銀座のみゆき通りをウロツキ、ふとった体で
美容体操にはげむ人々のむれと、みることができよう。宗祖
をビートルズにたとう、念仏修行を美容体操になぞらえるこ
とは、宗門の学者先生からいわしむればとんでもないことで
あるかもしれない。しかし、わたしはときどきブラウン管を
流してきこえてくる

骨まで、骨まで、骨まで愛してほしいのよ

をきくと、ひとりでに、一つの言葉を連想するのである。

学生(かくしよう)骨になりて、念仏やうしなわずらん
という法然上人のお言葉である。

宗祖はすでに、八百年の昔に、現代の若い人々の心情をじ
つに適確に、つかみとっておられたのである。いうなれば、
宗祖は平安末期に出た、日本の、偉大なるビートルズだった
のである。

お 盆 と 生 活



七、ばちと冥利

篠崎 家の年寄がよく罰が当たるといいますがどういふことなのですか。

中村 罰が当たるといふことはこうだと思ふ。仏様はこわいもので悪いことをすると罰が当たるといふ天罰などと結びついて考えやすいですね。罰が当たるとはもったいない精神だと思います。もったいないといふことは、自分の命もいただいたものであり、全てのものは自分勝手に出来るものではない。ありがたくいただき大切に使うといふかねばならないのです。それに反するところには罰が当たるといふことができたと思ふ。ですから因果応報といふ面よりもったいないといふ方に重点がいかなばならないのです。



尾台 母がよく冥利につぎるといいましたがこれも罰に通じることですか。

中村 これももったいないといふことで

自分は与えられたものを大切に生きていくといふ生き方をすれば神仏の目には見えないうご加護がある。そういうご加護をいただけない様なことはしてはいけない。これが冥利につぎるといふことです。

篠崎 よく大切にすること、無駄にしないといふことは各々感謝の念ですが、結局作った人の労苦ですね。そういうことを母はよくいつていたが、私はよく紙を無駄にしたが、そんな時母は紙すき場へ行つて来なさいといったが、もったいないといふことは作つた人への感謝の念が必要であると教えられました。

篠崎 男の人が外へ出て良い物を作るといふ美風を築き、女の人が家庭で美風を築くといふのが自然ではないかと思ひます。

三浦 私の所へ米国の留学生がお茶を習ひに来てゐるが、明治の頃の日本人の心のあり方を知りたいといつております。私は胸の中にある母の残したことをそれとなく教えておりますが。

中村 今日は世の中が変つたので日本人のもつてゐる大切な美しさといふものが忘れられ

ている。新興宗教等では自分の幸福を考え、先祖は忘れられた存在で自分だけが中心であるという考え方が強いのですが、今日の様に物質観が非常に発達してくると、自分の欲望のみをそそりたがるのです。日本の伝統はそんな物質文化に重点があったのではなく、人間の精神生活、人間の家庭生活も心のあたたいところ、重点があったと思います。ものは乏しくとも、そのものを大切にすることによって冥利にそむかない生活があり、そこに日本人の昔からの美しい精神文化があると思います。

八、新興宗教

三浦 新興宗教に入る方も何かを求めて入信



したと思いますが。
中村 誰でも幸せになりたいし、手取り早くになりたいということからだと思う。
近道反応的なものな

のです。

篠崎 でも宗教といわれても何んであるか、すぐには答えられませんね。



中村 宗教とはことばでいうものではなく、心持ちです。先祖を大切にする心持ものを大切にすること、持が宗教に連なるものなのです。日本の仏教、大乗仏教の良い点は日常のことの中に宗教がある。これを離れては宗教はない。この点が日本仏教の到達した最後の点なのです。それが逆に日常のことのみになって宗教が忘れたものになったのです。このむづかしい仏教の哲理というものが今日我々が生きていく中ににじんで行くというものが大乗仏教の立場なのです。日々の生活で宗教とか信仰とかいわなくとも、そこに生きていくところに宗教があるのです。

篠崎 では意識しなくとも自然の中にあるということですか。
中村 その日を大切に生きていくということ、よい訳です。おかげ様、ありがたいという中に仏教があるのです。

篠崎 毎日線香をあげないから罰が当たるとよくいわれるのですが。

中村 それは一つの教えで、線香をあげていただくという風に解釈すべきです。私の知人の家で毎月小遣いをあげるのに、まず仏前に置いてからいただきますそしてから渡す人がいますが、それと同じだと思います。
三浦 知らず知らずのうちに近づいているという証拠があるのです。私の教わった茶の師匠が「私が死んでも見てござる、知ってござる、聞いてござるから、めったなことは、

出席者

中村 康隆

(大正大学教授)

三浦 純亨

(煎茶道黄葉園茗流家元)

尾台 妙子

(大正大学々生)

篠崎 豊子

(主婦)

司会 編集部

してはならぬ」といわれたが、それが実に耳に残っています。やはり茶も正しい方にもっていかねばならないと思うし、私の一つ一つの行動を見ていられる様に思い心のささえとなっています。

中村 それが先程の冥利につきるとか罰が当たるということにつながっているのです。それは超罰的なものではなく、口ぐせの様なものです。悪いことをすれば仏様の罰が当たるとかこういう祭りをしないからいけないのだといわれると、そのことが耳についてそうせざるを得ないと考えるのです。素直な生活の中に宗教があると考えねばなりません。

九、素直な活

三浦 素直な生活ということは簡単なことの様で仲々出来にくいことですね。いろいろな意味がその中に入っていると思います。素直な生活とは無に通じるのですね。素直な生活はおうおうにして無視することに取り違えられるが、素直という意味がはっきりとしないと弊害が生じると思います。

三浦 私はよく考えるのですが、風呂敷はハインドバッグと違い、物を自由自在に丸いもの

は丸く、四角のものと四角く非常に素直につんでおりますね。

中村 それは仏教の本当の精神にあったものですね。

尾台 お盆とは何かすがすがしい、さわやかな印象があるのですが、季節的な感覚のためでしょうか。

中村 お盆ということばは、古くはものをそなえる器の名なのです。祭りにおぼんに季節の作物を盛ってそなえる、これがお盆の祭りであると解釈されたのです。

篠崎 おぼんにそなえておそなえするということは供養の意味でしょうか。

中村 特別な気持をあらわすために使った器だと思っています。

中村 初物をそなえるということは昔の人の本当の気持、素直な気持のあらわれであると思います。最初の人間の人間らしい念をもった感謝の念のあらわれなのです。ここに他の動物とは違った人間としての情愛の念が秘んでいるのです。この情愛の流れというものが

お盆にまで伝わってきたのだと思います。司会 いろいろありがとうございました。

暑中御伺

真仏教舎本部主宰

裏辻賢洲

福岡県宗傑郡福岡町 大善寺住職

祐天寺住職 巖谷勝雄

東京都目黒区中目黒三の一〇六七

浄土宗宗議会議員

光運寺住職 飯田信弘

長明寺住職 小布施弘学

長野県埴科郡松代町東寺尾区

良忠寺

横浜市鶴見区矢向町六二五

無媒随録

須藤 隆仙

東京のあるテレビ局から人がきて、『日本の詩情』という放送の中に、北海道をとりあげることになり、その一つに北海道での円空の足跡をたどりたいということであった。地元の新聞社からの紹介で、私になにかとその指導をしてくれというのである。

指導などということとはできぬが、私で知っている範囲のことを教えてあげ、それに対していろいろと質問され、そのために数時間を費してしまった。

それから数日して、こんどは二人づれのカメラの方がみえ、私のいる寺の円空仏を丹念にフィルムにおさめた。それがなんと二日ばかりという大仕掛けのものであった。私の説明などもテープにおさめたが、その放送は東

京、大阪、名古屋、九州、とかのネットよりなく、北海道には放送されないということでは私はそれを見ていない。

ただ驚いたのは、その仕事の丹念ぶりである。わずか十二・三分の放送だそうだが、準備のためにほう大な時間が費されるのであった。どうして北海道に放送されないのに、こう丹念に北海道をとりあげるのかと聞くと、この放送のスポンサーが某地区のある公通案内機関だそうで、シーズンにそなえ、北海道旅行の客人を増そうという意図のため、それで北海道に食指が動くようにとこれを企画したのだということであった。商魂にもまた感心させられた。

ところで円空の存在がとみに注目されるようになったのは戦後である。最近では北海道旅行者の中にも、道内の円空作を尋ねてあるく人が多い。早稲田大学の美術専攻の女学生が、卒論のためといって、私を尋ねて円空の資料をねだっていったこともある。

最近また洞爺湖の島の堂に安置する円空仏が盗まれたこともあった。これは間もなく発見されたが、高価なことに目がつけられたの

である。

しかし戦前の円空仏は決して優遇されてはおらなかった。北海道の円空仏は田舎の堂社に安置されているものが多く、その堂社が神社になったため、排仏毀釈のときに海に捨てられたものさえあり、また神社の物置き小屋の中に放りこまれていたものを、子供たちが引きずり出して、首にナワをつけて遊んでい

るものさえあった。しかし北海道にはわりあい早くに、円空の事跡を研究する人たちがあって、それがかえって、円空の生地岐阜の郷土史家を逆に刺激して、それによって岐阜での円空研究がはじめられたのであった。

ごく最近はまだ、立命館大学の梅原猛教授が北海道へきて、木喰の木彫仏を調査し、木喰は円空をまねて木彫をはじめたのだと発表し、北海道新聞社から私はそれについての意見を求められるなどした。

本地垂迹の信仰を具現するために、円空の仏像彫刻の旅は北海道から始められた。この先覚の存在を思うとき、ひと一人の力のおそろしさに、つくづくと驚嘆するのであった。

もののいう「阿弥陀様」

武田了範

六月末のある日暫く会わなかつたKさんが朝からやってきた。挨拶もろくにせず

k うちの阿弥陀様は誰が作った?

山主 君のうちの仏様は誰がお作りになったか知らぬ

k 仏様はものをいわれるか?

山主 さあどうだか、一体どうしたと言うんだい? 夢でも見てたのかい?

k なあに夢なんかではない、昨日の晩方だもの、この眼ではっきり見たんだ、仏様がものを確かに仰有った。

山主 どう仰有った?

k それでよいそれでよいと二回間違ひなく仰有った。お口が動いたんだもの

山主 一体君は仏様に何を頼んだんだい?

k 別になんにも頼みはしない

山主 なんにも頼みもしないのに仏様がものを仰有るはずはないが?

k それがなあ聞いて呉れ、和尚さんも知つての通り私には八十二になる老母がいる。長らくねているが、至って気ままで頑固、五重にはつきはしたが仏様は余り拝まぬ。私には家内は死んでいないし、孫夫婦は仕事が忙しいものと年寄は面倒臭がつて近づかぬ様にす

る。病氣だからとて介抱人を頼んでも口やかましい老母では続かない。仕方がないから私自身で介抱している。長の月日寒い日、暑い日、洗濯一つにしても子供の下の方の世話なら量も少いし臭くもないが、大人しかも老人ともなれば量は多いし、臭いの臭くないのつて全く問題にならん、それに毎日三度の給仕口に合うこともあれば、合わぬこともある、気に入る時はそれでよいが何か気に入らぬと忽ち「この家は私のものだ、汝等出てゆけ」とくる。そうかと思うと「裏の池へ飛込んで死んでやる」といつて見たり、「首を吊つてやる」だとか全くやり切れないことが度々ある、昨日も何が気に入らなかつたのか「裏の池へ飛込んでやる」というのをやつとなだめでは見たものの、思えば私というものの程業の深いものはないわい。御先祖のお陰、親のお陰でこの世に生れ出て今日まで五十有余年、ともかく生きてはきたものの、余りにも罪深ければ一人の親へさえ満足には仕え得ない。悲しさに堪えかねてお仏壇に灯明をあげ線香をあげて、み仏様、御先祖様、罪業深き私で御座います。南無阿弥陀仏々と拝んでいた

ら、阿弥陀様が「それでよい、く」と二口確かに仰有った。一体これはどういうことなのかい？

山主 よくわかった。それは阿弥陀様の御言葉に違いあるまい、阿弥陀様は見通した。考えても見給え、世界中探しても、もう君には親としては今の老母以外にはない。海山の御恩、最後の暫くの介抱位で恩返しのできるわけではないが、それでも介抱さしていただくのだと喜べ、だいたい君は少し許り介抱したからとて親から礼をいうてもらいたい、笑顔の一つもしてもらいたいと思っていたのではないかどうか？

k そう言われて見ればその通りだ。

山主 それだから悲しい辛い思いをするんだじゃがなあ、人間お互に誰でも、少し許りの親切を人の為にしようものなら、喜んでもらうか、お礼の一言でも欲しいものだ、之が凡夫の浅間しきとでも言おうか、但し君も心の奥底にはそうは思いながらも一生懸命人並に介抱してきたんだ、その通りでよい、「それでよい、く」と阿弥陀様が仰有ったんだ、だから元氣を出して出来る事なら、ほめてもら

おうの、笑顔の一つもしてもらおう等考えずに只ひたすらに介抱することだ、どうだろう。

k 有難う、よくわかった、これから心を入れかえてより一生懸命に介抱しよう、阿弥陀様の言葉がわかって嬉しい。

有難うくとお礼をいって帰えろうとするので、おい一寸待てよ。

山主 君の老母はもうそう長くはないぜ。

k それがどうして分る。

山主 阿弥陀様がものを仰有ったんだから、それで君に一つ頼みがある、君のいう通り君の老母は余り信仰深い方ではない、だから最後臨終ともなればお念仏が出るかどうかかわらない、君も五重相伝を受けている人故病人がお念仏を申すことが出来ぬならその病人に代って病人の呼吸に合してお念仏を申してもらいたい、そうすれば必ず老母は救われる。

k 有難う、きつとそうするよ。

お礼をいいながらKはお昼頃帰ってゆきましたが、どうでしょう、Kが家に帰りついた頃には老母の様子は全く一変していたのです。Kの顔を見るなり、よう帰った、疲れたろう、という、御飯を持ってゆけばようして

呉れる有難う、おまえさえ居て呉れば外に誰も来て呉れないでもよい、そうしてこの老母はKのすすめるままに一緒にお念仏を申し何事につけてもKに全幅の感謝をしながら十日余りの後七月八日午後最後の時がやってきました。之を知ったKは、

「さあお母さん阿弥陀様を頼みましょう。

お母に代って私がお念仏を唱えますから今こそ御浄土へ救われてゆくのですぞ、南無阿弥陀仏々々」

ここぞと許りKは全身の力をふりしほってお念仏を唱えますとどうでしょう、かすれゆく呼吸の下動かぬ身体をねじ曲げてこの老母はふるえる両手をむりに合せ

「南無阿弥陀仏々々」

と申しながら喜びを顔にあらわし、深き縁に結ばれた我子に感謝しつつ静かに安らかに呼吸を引取りました。

私はKに君は日本一の孝行者だといってやりました、Kはうなずきつつ老母の靈前に合掌念仏するのでした。

み光を拝して

大西ハル

「昭和三十九年三月二十五日」忘れようとしても忘れることの出来ぬあの呪わしい交通事故で、天にも地にもかえがたい一人息子の晋を、此の世から奪い去られました悲しい母でございます。

その日、主人が少し身体の工合が悪いから役所を休むと云って寝ておりましたのでテレビを見ながら「お母さん、朝から御馳走だね」と喜ぶ晋と、二人だけの朝食をとりました。が、その画面、あろう事か、母一人子一人の生活の中で、スキーに出かける支度をして自殺に行く息子を、母親は知らずに「気をつけ

て行きなさい」と申していつまでもいつまでも見送っているところでした。「お母さんも、晋ちゃんが一息子だし、もしこういう立場にたったら気狂いになつてしまうだろうね」と申しました時、晋はたつた一言「ウン」と気のない返事をしたきりでした。それから好きなレコードを聞き、気嫌よく家を出ましたが、三十分程して、勤先の高校生の息子さんをつれ、前夜修理したテーブルコーダーを取りに来ましたので、コーヒーをいれてやりました。晋は二階へ上って、しばらくの間お店の息子さんにステレオをかけて

お聞かせしておりました。九時半頃、再び家を出る時は雨が降っておりましてので、脱ぎ易い長靴を出してやる主人と二人で「雨が降っているから気をつけて行きなさい」と見送りましたが、それが最後になろうとは、神仏ならぬ私たちには知る由もございませんでした。

ほぼ一時間後「晋君が三沢のグラウンド前で事故、出血多量で意識不明」という勤先からの知らせ……。

余りの驚きに気も転倒して、足も地につかず、ただ、震えているだけでございました。主人に力づけられ車で現場にかけつけましたが、可愛想にも、道路に放り出されたままっております。息子を見た時には、気が変になつていたのでしよう。

車から降りるように告げる主人の言葉も耳に入らず、また息子の側へかけ寄りました主人が戻って来て、「晋が死んだ!」と申したそうですが、その言葉も解らず、横になつてゐる息子の姿に、ただ泣き叫んでいるだけでした。

「晋はどうしました? 医師はまだですか?」

無意識のうちに聞いたのでしうか、

「大西君亡くなられました」と云われました時、私はまるで気狂いのように取り乱しました。「晋の側へ連れて行って下さい」と、大声で叫びました。余りのとり乱しように、他の人々に押えられ車から出して貰えずにいた私に、主人は何か申しているようでしたが全然覚えておりません。

神奈川警察へ行き、主人が死体引取りの手続きをしている間も、私は部屋の中を行ったり来たり、人が見ていようがいまいがそのような事は少しも気に留めず、泣きながら歩き廻っております。

病院で遺体の検視をして、家に戻りましたのは三時頃だったかと思います。調べによりますと息子が、三ツ沢の坂を上りきったところで、行先の地図を確かめ車を出すと、すぐ反対方向から猛スピードで走って来た、ある建設会社のトラックが、前の車を追い越そうとしてセンター・ラインを越えたところ、雨で濡れた道路を晋の車の直前で横すべりをしそのまま衝突したという事でございます。

「危ない！」と一言云ってハンドルをいっ

ぱいに切りましたが間に合わず、屋根は飛び散り、ドアは両方へ開き、晋は頸動脈を切り即死致しました。同乗のお店の息子さんは、幸いにもカスリ傷一つせず無事でしたが、晋は犠牲となり命を失ってしまったのでございます。

あの朝、あんなに気嫌よく家を出て行きましたのに、わずか一時間たらずで死んでしまふとは、人間の命程はかないものはないと痛切に感じました。

それからというものは、母としてせめて息子の霊だけでもなくさめてやりたいと思い、雨にも負けず、風にも負けず、三周忌を迎えた今日でも、毎日墓参りをせぬ日はございません。

菩提寺では法然上人様の御命日に当たります二十五日には毎月「月例会」をしておりますが、その日はまた子供の命日でもありますので、余程のことでもない限り出席させて頂きお住職様の有難いご法話やら、お経を教えて頂いております。

私の家のご仏壇にも阿弥陀如来様をおまつり申し上げ、朝夕お経をあげさせて頂いてお

ります。その時には必らず春光院精誉定居士をお護り下さいますよう、また私達老夫婦の行末もお護り下さいますようにと念じないときはございません。

去る六月十六日（月は違いますが私の母の命日でございます）午前二時突然キラキラと何とも言えぬお光を放って晋のお墓の戒名の彫ってありますところに、神々しいお姿で阿弥陀如来様がお立ちになっていらっしゃるではありませんか。私は余りの有難さに、また自分の泣き声に目がさめ早速階下の仏間にまゐりまして、ご仏壇の扉を開き、お蠟燭とお線香をあげお念仏唱え、阿弥陀様に深く御礼申しあげました。

たとえ夢であつても有難くて有難くて、嬉しさのあまり次から次へと涙がこぼれて困りました。阿弥陀如来様が、お前の子供の晋は私が護っているから安心をなさいと、おおせられましたように、私には感じられたのでございます。

それからまもなく主人も階下へ降りてきて「何んだ、まだ二時ではないか、仏壇の扉なぞ開き、お蠟燭やお線香なぞあげてどうした

のだ」と言われましたので、阿弥陀如来様のお話をいたしましたら、主人もびっくりしておりました。

それから私はどうかしてこの有難いお話を皆様にお聞き頂きたいと存じまして、丁度お隣の奥さんが信仰の厚い方なので、その話をいたしましたところ、その方は広島を生れて

「広島というところは非常に信仰が厚く、十六日は阿弥陀如来様のご命日にあたりますので、各寺院では、それぞれご住職さまが有難いご法語をお聞かせ下さいます。私も広島に参りましたとき、毎月十六日には欠かさずお参りさせて頂いたものでございます。広島にはまだ姉妹も大勢住居しておりますので、十

六日には皆揃って、お参りをかかしません」と申され「私など見たくとも見られません。まして阿弥陀様のご命日にお姿を見られたので本当にあなたはお幸せ、晋ちゃんもきつと阿弥陀如来様にお護りされていらっしやることでしょう」と非常に私の夢を羨ましがられたのでございます。

現代語訳 歎 仏 偈

―その三―

吉 田 定 久

(9) 布施調意

戒忍精進

如是三昧

智慧為上

(9) 修むる行の数あれど

智慧と禪定

上れたり

(9) 人類の雄者（仏）になる為の行は沢山ありまして、総称せば「万行」と云われ、

別称せば ①布施、②持戒、③忍辱、④

精進、⑤禪定、⑥智慧の「六度」と云われます。但し六度と云っても、前の四度

（施、戒、忍、進）だけでは力が弱く、

禪定と智慧を加えて「六度」になって「初めて迷界を脱れ出る偉力（行）となるのであります。此の意味に於て六度の中では「定と恵」の二を、すぐれた（上位）行とするのであります。

(10) 吾誓得仏

普行此願

一切恐懼

為作大安

(10) 仏と成るまで

願うなり

悩みある人

導かん

(10) 私は今日から…王の御指導の下で…六度万

行を実修して成仏するまで、此の様に誓います。

「煩惱に追われて恐怖に悩んでいる人達を、仏の境地にまで導きたい」と。

(11) 仮使有仏

百千億万

無量大聖

数如恒沙

(11) 御仏在まして

千億万

砂の如し

其の数は

(11) 若し御仏が百千億万も御いでになる、否恒河（印度の北部を西から東へ流れている…ガンジス河）の砂の数ほどおいでなさる。

(お経の話) その八

— 観無量寿経(二) —

仏身と仏心について

村 瀬 秀 雄

立像は急ぎ来迎のお姿

韋提希(いだいけ)夫人は、お釈迦さまの

教えによって目の当りに極楽浄土を見ることができました。その時の夫人の喜びは大変なもので、想像に絶するものがあつたと思われまふ。しかし夫人は自分だけが救われ、喜びにひたることができれば、それと同時に他の者も同じく救われ、この喜びを同じく他の者にも味ってもらいたいと考えました。そこで夫人は重ねてこうお願いしました。

「お釈迦さまが世を去られた後の世の中は、悪事はますますはびこり、人々は一層汚されることになりました。このように苦悩

に満ちた人々は、どうすれば極楽をみることができるでしょうか」

そこでお釈迦さまは、極楽の様相を見ることがのできる方法の一つ一つ具体的に説かれました。この方法というのは十三通りあつて定善十三観といひます。初めに極楽の方向、次に極楽の様相、そして阿弥陀さまと脇士のことを説かれました。

その内の第七が華座観といわれ、その中に「この語を説きたまう時に、無量寿仏、空中に住立したまう。観世音大勢至、この二大士は左右に侍立したまう。光明熾盛なり」

とあります。即ちお釈迦さまが韋提希夫人

に対していると、丁度その時に阿弥陀さまが観音勢至の二菩薩を脇士にされて、お現れになつたというのです。住立というのは立ったままに立っていることですから、この時の阿弥陀さまのお姿は空中に立ったままでおられしかもお身体は光り輝いていたというのです。このように阿弥陀さまは、立像で来迎せられたのですが、その理由について善導大師の説明を引用すれば

「娑婆の世界には多くの悪が同居してゐる。そのためにあらゆる苦悩が渦をまいてゐます。享樂は甘い微笑を以て肉体に迫りきたり、恐るべき惡道は口をあけて待ちかまえてゐます。従つて阿弥陀さまは常に動いて迷える者を救つて下さるわけで、もうそうでなければ急場に間に合はぬことになりかねません。即ち阿弥陀さまは、お立ちになつたまま、常に急いで来られるのです。」

といわれています。人々が極樂に往生したいと願うならば、直ちにお迎えに来られ、苦悩の衆生を救うために急ぎ来迎されるために阿弥陀さまは立ったままでおられるのです。このお姿を立像の三尊といひます。



ベトナムに祈る (一)

小布施弘学

一

仏都バンコックの中央にあるルンピニ公園には、カンナの花が美しく咲き乱れていた。ここに孟宗竹と芭蕉の葉でつくられた日本軍の兵舎があった。春夏秋冬それぞれ趣の変わった日本から常夏のタイ国に駐屯を命ぜられた私は、日夜営々として警備の任にあたっていたのである。

炎熱帯を焦すような暑さではあったが、時々やってくるスコールが救いの女神だった。

祖国を遠く離れて出征してきた身であれば、生還は到底期待せられない。従って日本へのみやげ話にはならないが、折角仏教国にきたのであるから、休日を利用してつとめて寺院に参詣したのである。

タイ国は仏教(小乗)を国教として、国王はそれを篤敬し国民に信仰の範を垂れていたのである。だから駐屯軍の規則第一条には、寺院並に僧侶に対し、絶対に不敬のないように命令されていた。若し不敬でも起きようものなら大暴動が発生して駐留に多大な支障をきたすのである。

タイ国民は、ある年令に達すると、すべて寺院に入って数ヶ月、仏教の修行をしなければならない。これを卒えた者が始めて一人前の成人として認められるのである。

人間形成の上に於いて、仏教の信仰がバックボーンになっているのであった。

それにひきかえて、頹廃的な風潮の中に、人心の帰趨を失って、徒に自意識過剰におち入っていく日本の現状を憂うも

のである。

官能的なものばかり食って、人間以上に偉大なるもの、美しきものへの関心が薄れていく誠に情けない時代である。

蒸し暑い南国の夜が明け始めると、黄衣に裸身を包んだタイの僧侶達が、静かな足取りで行乞してくる。どの家の門先にも供養の食器を持った人々が立っている。

行乞の僧が門先に訪れると、恭しくそれを鉄鉢に供養し僧に向って五体投地の礼拝をするのである。

しかも供養する品は僧達が寺院に帰ってすぐ食べれるように、煮たきしてあるのである。自分が食べれるようにして、み仏にも供養する心は、仏を愛敬する素朴にして純心なる姿である。

今私は山口県青海島の或寺に、生涯を仏前給仕に捧げている一老僧を思い出している。

仏器の実は鄭重なるあつかい、そしてみ仏がすぐ召上られるように、果物の皮をむいて小切りにし、仏飯や汁菜は専用の鍋で煮て朝夕供養している敬虔な姿に接したのである。

二

私はバンコックに名残りを惜しみつゝ、仏領印度支那（ベトナム）に進駐することになった。カンボジア王国の首都プノンペンの夢幻的な美しい夜の町を、トラックにゆられなが

ら通過して、サイゴンに着いたのである。

このサイゴンは、今ベトナム戦争の渦中に巻きこまれていく宿命の都市である。

数カ月前私は、祖国よりの長い船旅を終えて、サイゴンの外港であるサンジャックに着いた。生れて始めて見る南国の光景である。

眼にしみるような紺碧の空と海にはさまれた緑の陸に、点在するレンガ造りの赤い家が、灼きつくような太陽に燃えていた。

私達の船は昼間、敵機の襲撃が危険なので、深夜になってドンナイ川の河口から約五十五キロの運河をのぼったのである。

船は南国のきつい香りをかきわけて、静かに進んだ。ねむれぬままに一人甲板に出て見た私は、思わず驚きの声をあげようとした。

今甲板から仰ぎ見るあけの明鐘の、余りにも大きく、青く美しいのに驚いたのである。

それは、あだかも月夜の明るさであった。

釈尊成道の折、菩提樹のもとで仰ぎみられた、あけの明鐘に思いを馳せて、かの仙崖の歌をつぶやいたのである。

雪の山にむかし仏の見し星の

光りは今にかわらぬものを

サイゴンは古くカンボジアの首都の一つであったが、十七世紀に安南領となり、十九世紀なかば以後は、フランスの植民地となり（一八六二——一九四五）インドシナ南部に於ける政治経済の中心地として発展した街である。

然し貧富の差がはげしく、多くのベトナム人はフランスにさく取されて、タイ国と同様世界の米倉に住みながら、食うことが容易ではなかった。彼等の挨拶は、ウォング・アンコム・ゾオイ（貴方は飯を食べたか？）であり、食事する時は人目につく縁側でいるのである。これは飯を食っていることを他人に誇示するためであった。

インドシナは第二次世界大戦のあと、幾多の動乱を経て、十七度線を境にして、南はベトナム民主共和国に、北はベトナム民主共和国に分裂したのである。

思えば気の毒な安南人である。

三

月余のサイゴン駐屯を済ませて、私は途中の古都ユエに立ち寄り、北ベトナムの首都ハノイに向った。南北を結ぶ唯一の交通機関であるインドシナ鉄道は、甚だ原始的なスタイルの汽車で、薪をたいて走るのには驚いた。

そして空襲を避けながら、主に夜間運転であったため、ハ

ノイまで丸々二日間も要したのである。

ハノイはインドシナ北部の中心で、中国雲南地方への玄関口でもある。中心にプティラックという美しい湖水を挟んでフランス風の町と、中国色を加味した旧城内とに分れ、街路樹の豊富なことは、東洋のパリといわれていた。

ベトナムもタイ国のように仏教の盛んな国であったから、休みには一人で色々な寺院を巡拝した。トオイ・オングスウー（私は僧侶である）と挨拶すれば、どの寺も歓迎し親切に案内をしてくれたのである。

実にみ仏の教えに国境はない。

このハノイの近郊で、十六、七世紀頃製作された安南焼の茶碗は、紅安南とよばれて、日本の茶人の間に於いて垂涎のものである。粗雑なつくりで、うわぐすりは黄ばみ、高台の内側に鉄絵の具を塗ってあるのがこの特徴である。さて、大平洋戦争の始まる直前（一九四〇）に日本は、援蔣ルートを遮断することを理由に、インドシナに平和進駐を行い、フランスのインドシナ統治権を名目的に承認しつつ、実質的にはインドシナ全体を日本の軍政下においたのである。これに対して、インドシナ共産党を始め、各種の団体はベトナム独立同盟（ベトミン）越盟を結成し（一九四一）フランス植民地と日本軍国主義に対する武力抵抗を開始したのである。

家康と三河一揆



鶴田湛泉

上戦うことの不可能を知って、鉄面皮にも再び降って来た。彼は一命は助けられたが八面の城は取り上げられてしまったので、やむなく河内に落ちたが、落魄の末ほどなく病死してしまった。

佐崎の松平三蔵信次は、上宮寺の隣家敷を城郭に構えたので、佐崎の一揆は彼の味方を殊の外心強く思っ、頑強に抗戦して来たし、以前より彼は野心を抱いていた風聞もあったこととて、所領は没収されてしまった。九州に赴いた後、加藤清正に仕え加藤佐助と名乗っていたが、天草にて戦死したという。

大草の松平七郎昌久は、行方も知れず落ち失せてしまった。この時、一揆の主謀者元凶ともいふべき酒井將監忠尚は、降れば当然打ち首と思ったのか、尚上野城にあって抗戦の意を捨てなかった。多勢に城を取り囲まれたが、城矢は必死になって烈しく防戦した。このため寄手の犠牲も多く出て

小林金助初め二十余人が討死してしまった。而し結極、頑強な抵抗も空しく城は終

十四 三河統一

善秀寺等に籠っていた一揆のうち、石川日向守家成に諭され降伏した御家人達は、深く前非を悔い唐津の光西寺に一同集って今後は二心なく忠勤をつくすべき旨を認めた神文の誓詞を、家康に呈した。

こうして情勢が一変すると、直ぐと降伏を申し出たのは、松平監物家次であった。彼は一揆の主謀者の一人として誅せられることに定まっていたが、酒井正親と大久保忠勝が、家康に助命を乞うたので赦され、その上本領まで安堵されることとなったの

で、今更ながら寛仁な君恩に感涙して謝した。

蜂屋初め降伏を申し出た者共が大半して先ず東条の城を、攻め囲んだ。今まで度々と攻め囲まれたが容易に落ちなかったし、しきりに国中をおびやかして、「松平家の運命も早や傾きかけているわい」と哄笑していたさすがの吉良義昭も、今は防戦の術もなく己が罪の遁れ難きを悟ると、城をすて駿河に出奔し今川氏真のもとに身を寄せた。その後、芥川合戦のとき討死したという。

家康の妹婿という寵遇の恩義をすて、一揆に与していた荒川甲斐守頼持は、今はこれ以

光りは今にかわらぬものを

サイゴンは古くカンボジアの首都の一つであったが、十七世紀に安南領となり、十九世紀なかば以後は、フランスの植民地となり（一八六二——一九四五）インドシナ南部に於ける政治経済の中心地として発展した街である。

然し貧富の差がはげしく、多くのベトナム人はフランスにさく取されて、タイ国と同様世界の米倉に住みながら、食うことが容易ではなかった。彼等の挨拶は、ウォング・アンコム・ゾォイ（貴方は飯を食べたか？）であり、食事する時は人目につく縁側でいるのである。これは飯を食っていることを他人に誇示するためであった。

インドシナは第二次世界大戦のあと、幾多の動乱を経て、十七度線を境にして、南はベトナム民主共和国に、北はベトナム民主共和国に分裂したのである。

思えば気の毒な安南人である。

三

月余のサイゴン駐屯を済ませて、私は途中の古都ユエに立ち寄り、北ベトナムの首都ハノイに向った。南北を結ぶ唯一の交通機関であるインドシナ鉄道は、甚だ原始的なスタイルの汽車で、薪をたいて走るのには驚いた。

そして空襲を避けながら、主に夜間運転であったため、ハ

ノイまで丸々二日間も要したのである。

ハノイはインドシナ北部の中心で、中国雲南地方への玄関口でもある。中心にプティラックという美しい湖水を挟んでフランス風の町と、中国色を加味した旧城内とに分れ、街路樹の豊富なことは、東洋のパリといわれていた。

ベトナムもタイ国のように仏教の盛んな国であったから、休みには一人で色々な寺院を巡拝した。トォイ・オングスウィー（私は僧侶である）と挨拶すれば、どの寺も歓迎し親切に案内をしてくれたのである。

実にみ仏の教えに国境はない。

このハノイの近郊で、十六、七世紀頃製作された安南焼の茶碗は、紅安南とよばれて、日本の茶人の間に於いて垂涎のものである。粗雑なつくりで、うわぐすりは黄ばみ、高台の内側に鉄絵の具を塗ってあるのがこの特徴である。さて、大平洋戦争の始まる直前（一九四〇）に日本は、援蔣ルートを遮断することを理由に、インドシナに平和進駐を行い、フランスのインドシナ統治権を名目的に承認しつつ、実質的にはインドシナ全体を日本の軍政下においたのである。これに対して、インドシナ共産党を始め、各種の団体はベトナム独立同盟（ベトミン）越盟を結成し（一九四一）フランス植民地と日本軍国主義に対する武力抵抗を開始したのである。

家康と三河一揆



鶴田湛泉

上戦うことの不可能を知って、鉄面皮にも再び降って来た。彼は一命は助けられたが八面の城は取り上げられてしまったので、やむなく河内に落ちたが、落魄の末ほどなく病死してしまった。

佐崎の松平三蔵信次は、上宮寺の隣家敷を城郭に構えたので、佐崎の一揆は彼の味方を殊の外心強く思って頑強に抗戦して来たし、以前より彼は野心を抱いていた風聞もあったこととて、所領は没収されてしまった。九州に赴いた後、加藤清正に仕え加藤佐助と名乗っていたが、天草にて戦死したという。

大草の松平七郎昌久は、行方も知れず落ち失せてしまった。この時、一揆の主謀者元凶ともいうべき酒井将監忠尚は、降れば当然打ち首と思つたのか、尚上野城にあって抗戦の意を捨てなかった。多勢に城を取り囲まれたが、城矢は必死になつて烈しく防戦した。このため寄手の犠牲も多く出て

小林金助初め二十余人が討死してしまつた。而し結極、頑強な抵抗も空しく城は終

十四 三河統一

善秀寺等に籠っていた一揆のうち、石川日向守家成に諭され降伏した御家人達は、深く前非を悔い唐津の光西寺に一同集つて今後は二心なく忠勤をつくすべき旨を認めた神文の誓詞を、家康に呈した。

こうして情勢が一変すると、直ぐと降伏を申し出たのは、松平監物家次であった。彼は一揆の主謀者の一人として誅せられることに定まっていたが、酒井正親と大久保忠勝が、家康に助命を乞うたので赦され、その上本領まで安堵されることとなつたの

で、今更ながら寛仁な君恩に感涙して謝した。

蜂屋初め降伏を申し出た者共が大挙して先ず東条の城を、攻め囲んだ。今まで度々と攻め囲まれたが容易に落ちなかつたし、しきりに国中をおびやかして、「松平家の運命も早や傾きかけているわい」と哄笑していたさすがの吉良義昭も、今は防戦の術もなく己が罪の遁れ難きを悟ると、城をすて駿河に出奔し今川氏真のもとに身を寄せた。その後、芥川合戦のとき討死したという。

家康の妹婿という寵遇の恩義をすて、一揆に与していた荒川甲斐守頼持は、今はこれ以

に落ち、酒井將監はかろうじて城を脱出したが、さすがに己が身の罪の重さを恐れて駿河に出奔してしまった。

この他、一揆の徒党としてよき大将と頼まれていた鳥井四郎左衛門、渡辺八郎三郎、渡辺源藏、本多弥八郎正信、同弟三弥、波切孫七郎等は改易されてしまったので、いずれも遠国へ退いて行った。

こうして、さしも根強く抗戦していた一揆の首領もようやく壊滅するに至った。

而し一たん三河を追放された者のうちでも寛容な家康のこととて、帰参の叶った者も少くはなかった。

尚、一揆側に加担した地方武士や寺僧といえども、使えるものは家臣に加えられた。例えば、勝鬘寺の末寺、八橋の浄橋寺は一揆中に於けるその武勇を買われ、還俗して八橋茂左衛門と称して召しかかえられた。又七年二月の小豆坂の合戦に於て、家康の鞍の前輪に矢を射立てた矢作の正蓮寺の僧も召し出されて家臣となり、清水丹波と号した。

一揆の参謀格の本多正信は脱出して京に逃れ、松永久秀の客となっていた。その後、策謀ずきの彼は加越の一向一揆の謀主となって活躍したが、志を得ず流浪していた。大久保忠世が彼の非凡な材幹を惜んで、家康に嘆頼これつとめたので、罪を宥されて再び仕え家康の側近中でも無二の功臣となり、後年佐渡守正信と名乗る徳川の大柱石となった。

かくて一揆が一応鎮定すると、家康が門徒寺院に対して行った処置は、一步も仮借せぬほど峻しいものがあつた。

あんなにまとまっていた家中の空気をこんなにまでにした原因は一体何であつたかと考へ、それが信仰の力であるということがわくと、信仰による団結というものが君臣離間さえさすほどに、いかほど強く恐るべきものかを痛感せしめられたためか、一揆再発の根源を徹底的に断ち切ろうとした意途がうかがわれるのである。ただちに、土呂、針崎、野寺、佐崎の上宮寺以下有力寺院及末寺に対し転宗すべしとの厳命が発せられた。勿論門徒等も改宗すべしとの命が併せて下された。

更に道場までも悉く破却すべしとの厳命に驚いた門徒寺僧は、

（これは前の御誓詞に、道場は前々の如くおかるべき旨の仰せあつたのに、いかなる御理由でありますか）と抗議したところ（以前はこの地も野原であつたはず、それ故に、前々の如く道場を破壊ち捨て野原にせよ）との回答を得たのみであつた。

こうなると、寺院は云うまでもなく、転宗を拒んだ。これに対し家康は寺僧を糺弾し、一向寺院の堂宇を壊たしめ、その宗門を禁止し信奉する事を許されなかつたのでこの命に従わないものは、いずれも国外へ脱出せざるを得なかつた。

本願寺の一家宗寺院である土呂の本宗寺も例外ではなく、三河追放の憂き目を見なければならなかつた。再び一揆の悪縁とならないように、断乎たる態度を示したのであつた。

このきびしい処断には、一向門徒は云うまでもなく、家臣をも震憾させたに相違ない。

ここに永年積みあげられて来た本願寺教団の三河に於ける教線は、一時崩壊するに至った。

家康が一揆に対して取った処断はこのようにきびしかったとはいえ、後年織田信長が行った長島一揆の処断の惨酷さに比べる、すこぶる寛大であったというべきで、一人を戮罰に処せずして、国外放逐にとどめている。

とは云っても、一向宗の禁が解かれたのはその後、二十年もすぎた天正十年十二月三十日であったとしてみればその処断も決して軽いとは云えないであろう。それも石川日向守家成の母で、野寺の本証寺の門徒で篤い信者であった妙西尼のねんごろな請願によって初めて一向寺院の再興と、その布教がゆるされたのであった。

妙西尼は、刈屋城主水野左衛門太夫忠政の娘で、石川安芸守清家の妻であり、その異母妹お大は松平広忠に嫁してその間に生れたのが家康であるから、家康にとっては伯母に当るわけである。殊にお大が離別に

なった後は、妙西尼が家康を育てあげたのであるから、家康としても伯母の切願を拒み得なかったことであろう。

勿論この時の家康は既に往年の家康ではなく、既に四十二才という分別盛になっていたし、一方秀吉との対決を迫まられている時期を前にして、本願寺との握手が必要となつて来ていたとも云えるかも知れない。当時、一向宗徒の武力斗争は、既に天正八年閏三月、光佐（顕如）の石山退去によって信長の統一的政治力の下に終りをつげていたのだが。

而もこの時復帰を許されたのは、本願寺の一家寺院である土呂の本宗寺だけなのである。本宗寺の復帰とは別に岡崎に屋敷を与えられ、一番の道場を建てることを許されたが、それが岡崎の専福寺で、寺僧として請じられたのは、一揆勃発しようとした時、家康の命を奉じて宗徒との和平の交渉を試みたが失敗に終り、追手に殺されようとして難を大阪に避けた祐観だと云われている。

妙西尼の菩提寺である本証寺に安堵状が与えられたのは、その後二年もすぎた大正十三

年十月二十八日であったから、同じく一揆の主謀者であった佐崎の上宮寺、針崎の勝靈等の復帰も、この時まで遅れていたものらしい。

とまれ一時崩壊の危胎に瀕した松平家もこの一揆の結果、雨降って地固まるの譬の通り、却って家康を中心とする結束が強化され、家中挙げて以前より増した強固な団結が出来上ったのであった。これが将来の徳川家康が天下に飛躍するために、どれほど大きな源動力となったかは計り知れない。

一揆平定後、家康に忠誠であった家臣たちには、それぞれ褒賞が行われたのは云うまでもない。一揆の跡始末がすべて終ると、家康はかねての計画の如く、三河統一のため東三河にある今川氏の勢力を駆逐せんものと、軍を起こし初めた。莞爾と笑をたたえた家康が東三河進出の重要な拠点であり、更にかつての日、十一人の人質を処刑された宿怨の重なる氏真の将、小原鎮実の守る吉田城に迫ったのは、その年の真夏の六月であった。（完）

帳 問 質



年回法事を営む心構えについて

お教えください

年回法事は、一周忌、三回忌、七回忌、…廿三回忌、廿七回忌…等に営まれるものですが、東洋の習慣にしたがって、人間の生命と関係の深い七の数を基本として、おこなうようになっていきます。

年回法事のことを追善供養とか、追善菩提といっています。追善の「善」とは、善根功德のことであり、「追」とは父母や祖先の積んだ善きおこない、善き業を現在の子孫が追慕して、私たちも、なき人のように、善き功德を積もうと精進することにあります。

この形式には、いろいろの作法もあります故人の好きな供物を調べて、霊前にお供えしたり、親戚や知人を招いて、故人を偲んでお寺の和尚様と一緒にお経を誦誦し、御回向申し上げることが大切なことです。

およそ、法事というのは、「法」とは仏法のとてとであり、「事」は生活を意味するのです。すなわち、日常の生活の上に、み仏さまのみ教えをてらして、日常生活の行為の上に滅罪法浄を期するとともに、反省の中に、生活の心がまえを培うことも、法事の大切な意味です。

和尚様の読む回向は、亡き人に代って、浄供を設けて、冥福を祈ると同時に、私たちは日々の生活に善き行いをして、そのうけた功德を思向うすのであります。

「願わくは、この功德をもって、平等に一切に施し、同じく菩提心をおこして、安楽国を往生せん」

父母から祖父母へ、祖々父母へと続く永遠のいのち、その最後の命の保持するわたくし達が、この日に改めて生命の尊厳を確認しあうところに、法要を営む意義があります。

新会員紹介

青森県東津軽郡平舘村	木村 ハツ
青森県西津軽郡車力村	葛西 満永
長野市新田町	鹿島 良枝
飯田市上飯田六七二八	宮沢 一成
岐阜県揖斐郡揖斐川町	一心 寺
岐阜県揖斐郡揖斐川町	渡辺 キク子
千葉県佐原市佐原	法界 寺
横浜市港北区日吉本町一七七八川島	正夫
東京都江東区深川木場四の八	小柳 晟
魚津市下村木四一六四	梅原 達雄
福井県武生市東元町	山田 八重子
大阪市西成区天下茶屋一の一三森川	朋夫
大阪市西成区天下茶屋一の一七松田	房子
大阪市北区西寺町二ノ一五	古川 観瑞
大阪府泉南郡東鳥取町下出	大願 寺
島根県大田市波根町	清水 栄
広島市府中町桃山	依怙 宗依
福岡県飯塚市庄司二二五	千々和英明
福岡県遠賀郡芦屋町柏原	善福 寺
久留米市寺町六八	花田 玄道
大分県竹田市下木	秦 徹応

「人生相談」

痛手をこえて新しい途を

22才のN子さんは、ある商事会社の事務員です。会社のコーラス部で知りあった男性と一年程交際し、今年の秋には結婚しようという彼の言葉を信じ、心も身体も許してしまっただけなんです。ところが、半年前の移動で彼は大阪支社へ転勤しました。はじめの二カ月位は頻繁にくれていた便りも次第に遠のきたまにきた手紙はおざなりで、結婚の約束はどこへやら、心もとなないものとなってしまいました。しかも、社内の誰からともなく、彼が大阪で別の女性と交際しているという噂を耳にした彼女は、不安にじっとしていられず遂に休暇をとって大阪の彼の住所を訪ねたのです。そこに待っていたのは、失望だけでした。別の女性と交際しているという噂は、単なる噂でなく、彼の打って変わった冷たい態度からも信ぜざるを得なくなったのです。大きな打撃を受けた彼女は、それでも夢中で、と

にかく東京へ戻って来ました。

薬をもつかむ気持で来所したN子さんは、はじめ強い怒りの感情をあらわにして相手の背信行為をなじっていました。しかし、そんな気持も「どうしたら彼の心を取り戻せるでしょうか。私がいつそう大阪へ行って住むことにしたらどうでしょうか。それとも黙って待つ方がいいのでしょうか。」など、あれこれと訴えるうち、はじめ整った顔立ちを凍りつかせたようにこわばらせていた彼女が、涙をぼろぼろこぼし始めたのです。

N子さんの話が終らないうちに、私は、「変った心はとり戻せない」という絶望的な現実を見抜いていました。N子さん自身も決してその事実を感じないわけではなかったのでしょうが、出来ることなら痛手を避けたかったのです。そして空しい訴えを繰り返していたのでした。このような時に、現実を知らせ説得することが、どんなに無力なものであるか。そしてまた、必らずやがては立直っていくものであるかも、カウンセラーは学んでいるものです。彼女が絶望的な現実をはっきり

認め出したのは、それから二カ月も私との話し合いを続けた後でした。その間、私に出来たことは、彼女の心の痛手を理解し崩れそうになる心を支えてあげることだけでした。

二カ月後のある日、彼女は今までにない晴々とした顔をして来所しました。「あんなに好きだと思っていた人が、今ではただの不誠実な男にしか見えません。それに、あの人に捨てられたらもう結婚は出来ないと思います。で、すっかり混乱してしまいましたけど、過去のあやまちを忘れることにしました。自分さえ心を持ち直して、まじめにやっていけば認めてくれる人だっているかも知れない。この頃では、もっと教養を高めようと文学書を読み始めました。もうあんな暗い経験とは別れることができると思います。先生、これから何かわからないことがありましたら相談にのって下さい。」と言うのです。私は、多分そのような必要がないであろうことを予想しながらも彼女の頼みにいっても来所してよいことを約束してこの面接を終わりました。

—大正大学カウンセリング研究所

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 鉤すての藪 —

高橋良和

さしえ 小林健造

討論会という、一つの会議の形式がある。

一つ的话题をそれぞれの立場から意見を出して討議することである。

法然上人の時代にもこの討議会があった。

それを史実の上では大原談義と名付けているのである。

大原というのは京都市内の洛北をさすので、この地は秋もよし、春もよし、都会から離れたところにある歴史の里である。

この大原に三千院という天台宗の名刹があるが、その境内にある勝林院（しょうりんいん）というお堂がこの大原談義の会場となったのである。

なぜこの大原談義というような討論会が開かれたのであるうか。

この大原の里に、その昔天台座主（てんだいざす）という、天台宗の官長職にあって、のちその職を辞した顕真（けんしん）というお坊さんが余生をこの地でおくっていたときのことであった。

法然上人のおしえがひろまってくるにつれて、自分の信ずる天台のおしえで、救われるのにはなかなか大変なことであるが、法然上人の信ずる浄土のおしえとどちらが人を救うのには役立つか、それを法然上人を招いて討論したいということとで、上人を迎えることになったのである。



能谷蓮生坊



勝林院は三千院の前を通り越して竹藪につつまれたところにある立派なお寺である。ここの御本尊さまは丈六といって一丈六尺の仏さまであるが、この御本尊さまを前にして、法然上人と向い会って、顯真法師も坐るのであるが、このときの談義には、東大寺の俊乗坊重源（しゅんじょうぼうちょうげん）はじめ、奈良からきた立派な坊さんたちがならぶし、また比叡山からも顯真法師の応援のために立派な坊さんたちが坐るのである。

この前に天下分けてのこの二大名僧の討論を聞くためにこの勝林院は全く人で一ぱいというほど傍聴者があったのである。

「討論はいずれが勝つも釈迦の恥」という川柳がある。

同じ仏のおしえの優劣を決めることは、お釈迦さまのおしえの流れを汲むものにとって、まことに面白からざることであるが、然し、真剣に道を求めている人たちの心からすると自己の信仰の正しさなり、立派さを試めすのにはよい機会であったのである。

さて、談義ははじまったのである。

論談往復すること、一日一夜なり、とある、まる二十四時間不眠不休の談議である。

労組の賃上げ闘争ならいざ知らず、仏法のおしえのことに

ついでに討論会で二十四時間不眠の談義は大変だったろうと思うのであるが

さて法然上人は

仏法のいろいろなおしえは、なかなかむつかしく、誰でも救われるということはむつかしいことである。わたしのよきな無智な人間ではとても救われることは出来ない、然しただ仏さまの誓いのことばによる念仏の法門だけは、いつでも、どこでも、誰でも救われるのである。

と、信念のあることばを吐露（とろ）されたことについてさすがの顕真法師もその場に兜をぬいで、この他力のおしえの念仏の法門がいかに他のおしえにくらべて立派であるか、ということを立て証されたのは心から信服したからである。

勝ち負けをいうのはおかしいことであるが、顕真法師はすっかり、法然上人に魅せられたのである。

このときのように勝林院のお堂の前の立札にはこう書いている。

大原談義がはじまる前に法然上人の弟子である熊谷蓮生坊はもし師の法然上人のおしえが顕真法師の主張に負けたら自分がこの蛇（なだ）で顕真法師に切りかけてやろうところのお堂裏の竹藪にかくれて待っていたところ、法然上人のおしえが勝（すぐ）れていることがわかり、顕真法師が法

然上人のおしえに帰依することになったために、もったいた蛇（なだ）を付近の竹藪に捨てたのである。であるからこの竹藪を蛇すての藪という。

とある。

そぞろこの討論会のようにすがわかるようで、緊張した空気が読みとれるようでもある。

そこでこの談義がすむと、顕真法師は座を立てて自ら大きい声で念仏しながらこの一丈六尺の仏さまのまわりをまわると、あとにつづくのは、この談義に來会した人たちで、いずれも念仏してこのあとにつづいたということ、「この声山谷にみち、ひびき山野を動かす」とあり、信仰をおこし、縁を結ぶ人大かりきとつたえている。

もちろんその後顕真法師は法然上人のおしえに帰依したことはいうまでもないことであるが、洛北の大原の里につたえられる珍らしいはなしでもある。

この顕真法師はそのあと念仏の行を修することになり、この勝林院においてはいつも念仏のおつとめが行なわれたというところであるし、再び比叡山にのぼって、天台宗の官長職についたときも、比叡の山中のなかに念仏を修することを加えたということである。

まことに念仏の行者となった人である。

ご法語をいただく

末代悪世の衆生、往生の心ざしをいたさん
にきては、又他のつとめあるべからず。た
だ善導の釈について、一向専修の念仏門にい
るべきなり。
(念仏大意)

このご法語は「念仏大意」の最初の一句で
あります。これから念仏の教義を説くに当っ
て広く聴くもの、読むものに呼びかけた句で
あると同時に、この小論の結論を初めにかか
げたものであります。

「皆さん」というかわりに、末代悪世の衆
生と申したのは、現代に活きているすべての
人々という意味に解すべきであります。

法然上人のご自覚は、世は末代であり、自
身は凡夫であるということであります。末代
は末世であり、濁世であります。悪は悪を呼
び、争いは争いを起し、お互に対立し、抗争
し、相手を倒さねば承知できないといきま
いでいます。世の中は濁りきってしまい、仏教
でいう正しい智慧や見方は払底して、その片

鱗すら見出すことができません。こうした世
相はお釈迦さまが入滅してから長い年月（千
五百年以上）が経ったからで、自然のなりゆ
きとも申せることであります。こうした社会
にあつて、われ独り清しとなして難行を選ん
だとしても、まずできない相談といわねばな
りません。どう考えても無理であることを知
らされます。即ち自分は凡夫にすぎないこと
に気がつきます。法然上人は

「ここにわがごときは、すでに戒定慧の三
学のうつはものにあらず。この三学の外にわ
が心に相応する法門ありや。わが身にたへた
る修行やあると、よろづの智者にもとめ、も
ろもろの学者にとぶらひしに、おしゆる人も
なく、しめすともがらもなし」

と申された通り、痛烈な自省のもとに道を
求め、ご苦心の結果として末曾有の念仏門を
建立されました。

さてご法語は、次に極楽往生を願う者は、
他のつとめ、即ち一向専修の念仏門以外の仏
道修行をしてはならないと申されました。た
だひとへに善導大師の説に従って一向専修の
念仏門に入るべきであると申されました。

心ざしは意向であり、念願であります。い
たすは誠意を以て実現することにあります。
凡夫の活きる道はお念仏を称える法門しかあ
りません。ところが自身は凡夫であるという
意識が薄い人が多いことに気がつきます。

毎日の新聞はどこかで火災のあったことを
報じています。しかし自分の家は決して火災
にあうことがないと、誰もが信じています。
また自動車は動く兇器だなどといわれ、毎日
必ず事故が起きて、人々を殺傷しています。
しかし自分が事故にあう等とは誰も考えてい
ません。それと同じように自分も凡夫である
と反省しても、いつの間にか驕る心が湧いて
いるのに気がつきます。心の奥底の一部には
他人を侮り自分を優れた者と思う気持があり
ます。自分だけが、自分の集団だけが利益を
得ればよいのであつて、相手や社会が困窮し
ても一向に頓着しないというのが世相であり
ますが、もう少し人々に末代悪世の意識があ
り、己れは凡夫であるという反省があつたな
ら、現代の世相は必ず変えると思います。従っ
てもう少し念仏の信仰が拡がれば、噛み合う
社会の姿が改まると思います。

美しくやさしい

心を育てる

— 仏前の花 —

み仏さまのお供えものは、捧げる心もちと、み仏さまを信じ、讀える真心がこもっていることが大切である。いくら高価なものをお供えしても、不純なものであれば、功德は失われる。

お花にしても、どんな種類のものでもよ



いわけであるが、ただ、とげのあるものや、毒々しく、悪臭を放つものはひかえた方がよい。

およそお花は、み仏さまにお供えする場合に、美しい面を私たちの方に向けて飾る。み仏さ

まに捧げるならば、み仏さまが花のお面を御覧になれるようにお供えすればよいのに、反対である。その理由は、すべてみ仏さまにお供えしたものは、その施主の心を罰てる働きがあるからである。花を捧げるその心もちを、み仏さまはお受けになり、お慈悲の立場に立って衆生をいつくしみ給うのである。花は、み仏さまの慈悲のあらわれ、お花をあげて、拝む心は、花にあらわされるように、美しい、やさしい心が、自らの心の中に育てられなければならない。

生き生きとしたお花のようにありたいものである。人生にみずみずしいうるおいをあたえてくれる。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年七月二十五日 印刷

昭和四十一年八月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

伺 御 中 暑

西信寺住職

栗 本 俊 道

△住居新表示▽

東京都文京区大塚五ノ二ノ一〇

常光寺 大 谷 隆 雄

品川区上大崎一ノ七九四

白 井 玄 祥

浄土宗宗議会議員
蓮勝寺住職

柴 田 敏 夫

横浜市港北区菊名町五三

浄土宗宗議会議員

白 幡 憲 佑

横浜市南区久保山 光明寺

相福寺 明照幼稚園 杉 田 義 俊

三重県四日市市六呂見町 観音寺

記主禪師鑽仰会

岸 覚 勇

函館市船見町一八ノ二四

教学研究会

須 藤 隆 仙

八月十六日 無形文化財指定

二十五菩薩来迎会奉修

——おめんかぶり——

世田谷区玉川奥沢町

(田園調布線 九品仏下車)

九品仏 浄 真 寺

住 職 清 水 順 碩

天 光 院

真 野 竜 海

古き歴史と信用を誇る

株式会社 安藤法衣仏具店

京都市東山区古門前東山線西入

法衣部 電話⑤⑥〇六九〇

仏具部 電話⑤⑥二四三⑤三六

夜間専用 電話⑤⑥五〇七八

秋 元 朝 雄

東京都大田区田園調布四ノ五〇

法然上人鑽仰会

佐 藤 密 雄

佐 藤 良 智

中 村 康 隆

村 瀬 秀 雄

竹 中 信 常

宮 林 昭 彦

安 居 香 山

佐 藤 行 信

水 谷 哲 雄

佐 藤 成 順

長 谷 川 宣 丈

伺 御 中 暑

総本山 知恩院

門主 岸 信宏

執事長 鵜飼隆玄

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五(三八)

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎尾弁匡

執事長 里見達雄

大本山 光明寺

法主 大野法道

執事長 丸地弁信

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

執事 早川利雄

浄土宗宗務支所

支所長 新谷寛応
総務局長

鎌倉市長谷五五〇

大仏殿 高德院

電話 鎌倉七〇三番

東京都文京区小石川三ノ一四ノ六

檀林 伝通院

里見達雄

京都家政短期大学

学長 三枝樹 正道

華頂学園長

水野隆樹

京都市東山区 知恩院山内

静岡県富士宮市大宮

大頂寺 石井真峯

電話(〇五四四二)三四六五番